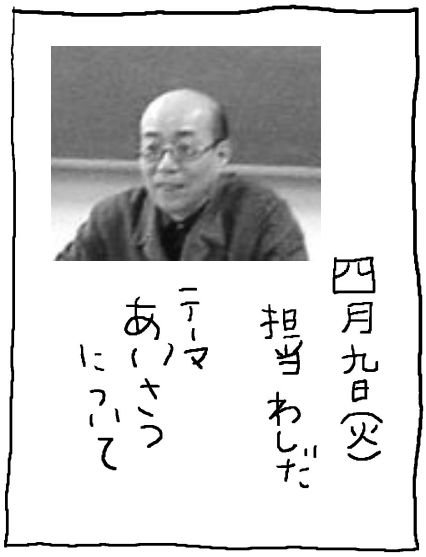
Osaka University Knowledge Archive

Title	あいさつについて語りあったあとで教室のみんなに
Author(s)	鷲田, 清一
Citation	臨床哲学のメチエ. 2003, 11, p. 8-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10708
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University



あいさつについて語りあったあとで教室のみんなに

鷲田清一

「出会いのてつがく」第一回目の授業は鷲田先生。
あいさつについて、いまどきの高校生と語り合いました。でもある生徒の「しゃべり場」みたいやなあ」という鋭いつっこみにはたじたじだったようで・・・。

先週は、初めての授業ということで、あいさつ代わりにあいさつについて語り合いました。「おはよう」とか「よう」といった、だれもが毎日しているあいさつに、なにかふだん気づいてもいない意味があるのか、それを考えてみようと思ったからです。

みんなにいきなり、友だちや家族や先生とふだんどんなあいさつをしているのか訊くのもはばかられましたので、とにかく「他己」紹介をしてもらうために、たがいにインタビューしあってもらいました。たぶんたがいにあまり知らないどうしだから、あいさつから入るだろうかと思ったからです。

実際には、あいさつ抜きで、せいぜい目くばせくらいで始まったようですが、みんなに、どんなこと訊いたの、と詳しく訊くと、おもしろいことがいくつか見えてきました。

まず、どうでもいいことや答えやすいことをあらかじめ選んで訊いていました。部活のこととか趣味についてとか。相手の性格とか悩みとか将来の夢とかについて訊いたひとはいませんでした。なぜでしょうか。たぶん、まだふたりの間柄もこれからどうなるか分からないし、たぶん授業でのつきあいだけだろうからということで、さしさわりのないことだけを選んで訊いたのだと思います。ちょこっと探りを入れることくらいはしたひともいたかもしれませんが、だれも深入りはしなかったようです。あたりまえといえばあたりまえのことです。まだ相手にとくに関心があるわけではないのですから。関心がなければ他人に立ち入って質問をするはずはありません。

あらためて考えてみれば、挨拶にもそういうところがあるようです。朝に会ったときにちょこっとあいさつするのは、あいさつだけにしておきたいからで、それ以上突っ込んで何かを言おうと考えてではないでしょう。先生に「おはようございます」と言うときには、それ以上突っ込まれないようにという思いもきっとあるでしょう。友だちになにかあらたまって話があるときには、いきなり「ねえ、ちょっと」というふうに切り出すでしょう。

これはみんなとの議論のなかで分かったこ

とですが、あいさつにはひとつ、「他己」紹介のインタビューと違うところがあります。あいさつの場合、どうでもいいような言葉を交わすのに、しかしそれが無視されると傷つく、あるいはむしょうに腹が立つということがあります。前本くんだったでしょうか、それは「存在を認めてほしいからだ」という意見がありました。時間がなくてその発言の意味をそれ以上考えることはしませんでしたが、これはあいさつについて考えるときたいせつな点だと思いました。

あいさつは不特定のひとに向かってなされるものではありません。いつも特定のだれかに向けられているものです。それに答えないというのは、（これは田中くんの言葉だったでしょうか）相手を「ムシる」ことです。そう、あいさつしたのに答えが返ってこないというのは、じぶんの存在がそれと認められていないということです。だから、ひとはそのとき傷ついたり、憤ったりします。

ふと思うのですが、これは携帯電話のマナーに通じるところがあるようです。他人がたとえば電車のなかで携帯電話で話しているときに不愉快に思うのはなぜでしょうか。これを考えるときにさらにもうひとつ、先に別の例を考えておきます。電車のなかで化粧する人が増えてきました。その姿を目にして気持ちのいい人は少ないはずです。なぜか。それは、化粧をしている人にとってじぶんは「他人」のひとりに数え入れられていないと、見る人は思い知らされるからです。電車のなかで化粧をしている人も同僚や友だちや恋人の前ではしないでしょう。じぶんが関心をもっている他人の前では人は化粧しないものです。じぶんの舞台裏を見られるような気分がするからです。じぶんのとても不安定な状態を見られるような。逆に電車のなかでは知らない人ばかりなので、ふとあと数分後に会うひとのことを思って化粧をする。その姿を見る人は、ああじぶんはその人にとって「他人」ですらないのだなと思い知らされる。だから気分が悪いのでしょう。

携帯電話にも同じようなことが言えます。電話で話している人にとって「他人」とは電話の相手、つまりはじぶんの仲間だけ。まわりの人のことは眼中にない。それで無性に気分が悪くなる。いまだに携帯電話に抵抗をおぼえる人がいるのは、そういうわけでしょう。まわりの人の目を意識して、さっさと隅っこに走る人には乗客はあまり目くじら立てないものです。

むかし精神科の医者さんでこんなことを言った人がいました。じぶんがだれかある他人のなかになにか意味のある場所を占めているという感覚と、じぶんがここにいるという感覚とのあいだには、深い結びつきがあるというのです。他人にじぶんがその人にとっての他人として認められること、つまり（哲学者の言い方を借りると）「他者の他者」というあり方こそが「じぶん」の核をつくるというのです。たとえば病気で一週間休んで、クラスに帰ってきたときにだれからも声をかけられなかったとしたら、人はじぶんはこのクラスのだれひとりにとっても意味のある存在ではないということを思い知らされるはずです。じぶんがい

てもいなくてもどうでもいい存在と思い知らされること、これほど人を傷つけるものはありません。じぶんが意味のない存在だということになるのですから。それに似た経験を人は電車のなかでするようです。

あいさつは、そういうたがいにその存在を認めているという合図のようなものかもしれません。あなたに関心をもっている、という。でも、関心をもたれるというのは鬱陶しいことでもあります。親や教師のことを考えるとそう思います。だから、関心はもっているけれど、深入りしない、でももし何かあったときは、何かする用意はある、その意味ではあなたに関心はある……というメッセージを、ひとはあいさつというかたちで送りあっているのではないでしょうか。

こういう、あいさつというかたちで安否を気づかうことを、昔の人は「問安」と呼びました。病気をして気弱になっているときに、だれかが見舞いにきてくれるのも、ああじぶんのことを気にかけてくれる人がいると実感することで、だからうれしいのでしょう。それは他人にじぶんの存在が尊重されていると感じることだからです。他人のなかにじぶんが何かある意味のある場所をもっているということがそれによって確認されるからです。

他人がじぶんに関心をもちすぎてもいやだけれど、ぜんぜん関心をもたれないのはもっといや、というところがあいさつに現われているのではないでしょうか。すると、挨拶しても返事しない人はそういう関係に入ることを拒んでいるというメッセージを発していることになり、つまり他人に対してじぶんが他人になってあげるということを拒否しているわけで、そうするとこんどはじぶんのほうがもう他人としては認められないということになり、いずれだれからも声をかけられなくなる。

こういうことが起こるからこそ、たがいに関心をもちあいながらも、密着しないで隔たりを置いておくという、そういう人とのつきあい方をするというのが、あいさつがマナーである理由なのでしょう。

「おはよう」「ゲンキーっ？」というふうに、あいさつではたしかにあまり内容のない言葉をかけます。それは、あいさつにおいては、問われていることがらよりも、じぶんがだれかに問われているということそのことに意味があるからだと思われます。

最後に、他人に関心をもつということの意味について、もう少しだけ考えておきます。東京ではじめて重度障害者で都立の養護学校の教師になられた人がいます。十年ほど勤務なさって障害がさらに重くなって、二十四時間要介護の状態になられ、教職を辞せられました。それでも若い人たちに何かを「伝える」という仕事を続けたいと、じぶんのベッドサイドを学校にしようと考えられました。若い人たちを対象に、一日三交替で介護アルバイトを募集されたのです。やってきた若者たちは、バトンタッチ用に連絡帳をつけはじめました。その連絡帳が

やがて交換日記のようになり、それぞれが連絡事項以外に思ったことをいろいろ書きつけるようになりました。そのノートを読ませてもらったのですが、そのなかにとても印象的な二つの感想がありました。

「たぶん同じことを友だちに話しても、すごく軽くとられるようなことでも、遠藤さんなら一生懸命聴いてくれるし、本気で答えてくれるし、それがうれしかったんだと思いますね。そのときは。」

「あなたが言語障害をもっててよかったと思う。一言一言を聞き漏らすまいと、耳を傾けることができるから。あなたが生まれてきてよかった。」

この二つの感想は、一見反対のように見えます。聴いてもらえてよかった、と、聴くことができてよかった、と。これは、ひとは他人に関心をもたれることで生きることができると同時に、他人に関心をもつことで生きる力を得ることもあるということを教えてくれています。他人の境涯に関心をもち、それにコミットしていくことで、じぶんがその人にとって意味のある存在になる……。そのことで、先ほどの哲学者の言葉を用いると、「他者の他者」としてのじぶんの存在を確認できる、ということです。福井高校ではボランティアに取り組んでいる人も多いと聞きますが、ボランティアに行くことの意味もきっとそういうところにあるのではないかと思います。

わたしたちは気心知れた人とのコミュニケーションはなかなか繊細で上手いですが（家族ではあいさつしなくても別のこまやかなメッセージを送っているのでしょう）、気心知れない人とのコミュニケーションはあまり上手くありません。社会生活とはいうまでもなく気心知れない人といっしょに暮らしていくということです。気の合わない人ともいっしょにやっていくということです。友だちや家族とだけいっしょにやっていくわけではないのです。そのとき重要なのは、もたれあわないけれど、しかしたがいに関心はもっているという、ちょっと距離を置いたしかしたがいの境涯を気づかいあう関係なのではないでしょうか。そういうスタンスで生きているという信号として、あいさつがあるように思います。よその会社の受付を通るときにも、ホテルのフロントでチェックアウトの朝に「おはようございます」とか「ありがとうございました」などと言うのも、あいさつがそういう気心の知れない人といっしょにやっていくという、社会のもっとも基本のマナーになっているからだと思います。　（わしだきよかず）